

『美人薄命』

作者 浅羽一

〈恐怖の奇病！美人薄命は真実だった!?〉

そんな見出しがコンビニの一番隅にある雑誌の表紙を飾ったのは、しばらく前のことだった。

記事に寄れば、〈近年、具体的な原因などが一切不明な病気によって、数多くの、それも美人ばかりが命を落としている〉と言うことらしく、〈果たして、この謎の正体は未知のウイルスであるのか、それとも全く別の何かなのか。しかしいずれにせよ、これが美人のみを死に至らしめる悲劇的な病であることは、最早、疑いようがない〉と、その内容は締めくくられていた。その上、次のページでは補足として、ここ数年で謎の突然死を遂げたとされる世界中の美人女優や有名人の名をつらつらと挙げ、〈当誌の取材によって、彼女たちの死の真相がようやく解明の糸口を見つけられたのだ〉。

勿論と言うべきなのか、これが発売された当時、人々のほとんどはその記事に対して不信感を抱くどころか、そもそも雑誌の存在さえ知らなかった。

だが、それからおよそ半年後、とあるテレビ番組がインターネット上でまことしやかに噂されている話の真偽を確かめようと言う企画で、この記事を取り上げた。そして、番組改編期の特別番組に相応しい予算を使って、徹底的に調べ上げた。噂の出所、原因不明による実際の死亡者数、その中に於ける「美人」の割合、新種のウイルスや細菌の蔓延している可能性、さらには医学や病理学の専門家のみならず評論家や霊媒師までスタジオに呼んで…。

結果、「これは単なる都市伝説」とされ、最後は毒舌が売りのお笑い芸人がそれをネタにゲストや観客を笑わせる、と言うのが番組の流れであり、また本当の趣旨でもあった。人々の間に衝撃が走ったのは、それから二日後のことだった。

若手の中でトップの人気を誇る美人女優の訃報は、あまりにも突然にもたらされた。しかも死因は不明、ただし警察は事故や事件でないと断定。彼女は、例の番組に新しく始めるドラマを宣伝する為のゲストとして出演していた。

最初に火がついたのは、やはりネット上だった。有名掲示板では膨大な数の書き込みが並び、それはやがて〈あの記事はやはり真実だったのか、それとも全くの出鱈目だったのか〉と言う、意見の対立へと方向性を変えていった。とは言え、まだまだこの時点では、両者の力関係も一目瞭然で、いわゆる〈真実派〉に属する人間ですら、その大半が面白半分であおっているだけという感じだった。

しかし、悲劇はそれで終わらなかつた。さらに二日後、今度は国際映画コンクールで主演女優賞を獲得したばかりの有名女優と、ようやく本格的に女優へと転身して初の主演舞台で大忙しだった元グラビア・アイドルの二人が、同時に、それもいきなりの心臓発作で死亡し。さらにさらにその翌日以降も、十代の少女達の間でカリスマ的な存在となつているモデル美女が、東京ドームや武道館の観客席をあつさり満員にしてしまう女性アイドルが、プロデビュールから間もないにもかかわらず圧倒的な実力と整った外見で一躍スターの座に上り詰めた女性ゴルファーが、他にも芸能人や有名人に限らず世間から「美人」と呼ばれている者達が次々と、案の定、唐突すぎる心臓発作や脳溢血によって…。

あまりと言えば信じがたい偶然の連鎖に、ネット上では、意見の対立が激化するどころか、いつしか真偽について改めて語る者はほとんどいなくなつていった。代わりに、最初の女優の死から一週間も経った頃には、ネット住民だけでなく、一般のマスコミ報道までも

が、恐ろしい奇病の原因を解明しようと躍起になっていた。

けれど、事態は一向に改善されなかつたばかりか、一層に深刻さを増していった。最早、それを単なるゴシップ記事の作り話だと嘲る者の方が少なくなっていた。

遂に、世間がその予防も治療も不可能な奇病を受け入れるまで、長い時間は掛からなかった。そうして悲惨な現実は、特定の人間に限らず、彼女たちを取り巻く全ての者にまねばなく浸透していった。

世界は、改変された。

まず、「死」に対する価値観や、その描き方が激変した。当然ながら、死とは永遠の別れであり、避けられない定めであつたのだが、それよりも何よりも、一部の人間にとつて死が紛れもない称賛と同義になつた。巷で流行るドラマや映画は決まつてヒロインとの死別をテーマにして、またそれを「悲恋」でなく「美しい必然」と謳つた。或いは、その一方で「逆整形外科」なるものが堂々と看板を掲げるようになり、それはあたかも延命治療のごときものとして、娘を持つ親の財布から大金をせしめようとした。道理を履き違えた医師によつて施される治療のせいでも、中には不幸にも命を落としてしまう少女も現れたが、彼らはそれさえも「美しかつたからこそその死」の範疇に放り込んだ。

男は愛する人との安穩な幸せを願う反面、心の片隅で早すぎる終焉を期待し、いざその際にはどんな行動を取るべきなのか、モテ本やマナー本ならぬ別れのハウツー本まで出版された。また、女性の中からは、どうせ死ぬのなら、いつ訪れるか分からない不安に怯えて暮らすよりも、いつそ美人に相応しく綺麗な状態で旅立とうと、自殺ツアーじみたものを提案する者が現れ、はたまたそれまで美しいと憧れていた相手がまるで死にそうにないと思うやいなや、あからさまに失望した態度を取り始める者も現れた。「可愛いね」、「綺麗だね」なんてお決まりの言葉ですら、年配の人々からは忌まわしいと拒絶され、しかし危険や恐怖に直面した時の動悸と魅力的なものに対する昂揚の区別を付けられない未熟な若者にとつては、それらはさながら魅惑の単語として喜ばれた。化粧品や美容グッズ、ダイエット食品などを販売する会社は頭を抱え、テレビのコマーシャルでは不細工が売りのお笑い芸人や年若い女性をイメージ・キヤラクターにするなど試行錯誤をした結果、最終的にはひたすらのかな景色を映して自社の製品がいかに自然で健康的なものであるのか主張した上で、「あなたも飾らず自然になろう」と勧めると言う、ある意味で本末転倒なものが主流になつた。

死んだら「美人」で、死なないと「不美人」。そんな考えが風潮として突出してきて、だからこそ年頃の女性達は特に、死ぬことを恐れ、死ねないことを恐れた。刻一刻と希少性を増し続ける美人に、欲望に忠実な男達は我先にと群がった。

時代は、ある意味で熱狂していた。偏つた刹那主義の前に、病気の仕組みを突き止めようと訴える声は掻き消されつつあつた。

だが、ややあつて騒動は思わぬ方向から冷水を浴びせられた。

人々を我に返らせた理由は、ともすれば滑稽に思えそうだったものの、実際はきわめて残酷なものだつた。

単純な理屈だつた。哀れにも突然の心臓発作や脳溢血で亡くなつた者の中に、時折、含まれていたので、明らかに世間的に見てそうでない者が。その数は、決して多くなかつたけれど、かといつて単なる偶然として済ませてしまふには少なくなかつた。

困惑は、初めの頃こそ密やかに、けれどひとたびネットやマスコミで取り上げられた途端、瞬く間に伝播した。

「人の想像力は、時に信じがたい結果を引き起こす。余命宣告を覆すほどの偽薬効果に然り、処女の想像妊娠に然り、果ては聖痕や予知などの類に然り。だとすれば、自らを美しいと本気で思い込んだ人間が、仮にそうでなかったとしても、世間で起こっている非常事態に己を重ねて、その結果として命を落とすこともまた、十分に有り得る話だ。そして、それは世間から美人だと評価されている者であれば、尚更に」

想像妊娠ならぬ想像自殺説をテレビで語ったのは、精神科医としても名高い優秀な医学博士だった。「この悲劇的な騒ぎにおいて、何よりも無惨な要素は、詰まる所、本来であれば存在しないはずのものによって、死ぬ必要のない人間が数え切れないほど命を落とした、と言うことだ」。彼の言葉は、その肩書きや実績と相まって、予想外の出来事に戸惑っていた人々の間へ急速に広まり、彼らの胸の奥にかすかな疑念を芽生えさせた。

そして、議論が再燃した。

とは言え、すでに意識の変わってしまった現状では、やはり博士の説こそをただの思い込みと断じる声も多かった。けれど、その一方で、遅まきながらウィルスも細菌も化学物質も遺伝的要素も何も原因として認められない病を、果たして一括りに「病気」と呼んで良いのかと、事実の再調査を検討しようとする声も少なからず上がってきた。中でも特に博士を支持したのは、大手化粧品メーカーを筆頭にした美容関連の企業やアパレル産業、それから世間一般にいる「死ねなかつた者達」だった。

結論は、なかなか出なかった。と言うよりも、無理矢理に先送りにしようとしている感さえちらほらあった。まるで時間を巻き戻しているかのごとく、病気に対する不信感が広がるに連れて、突然死に見舞われる「美人」の数は減っていった。

終止符を打ったのは、一つの死だった。だけど、それは美人でも何でもない、一人の男の死だった。彼は、かつてゴシップ誌にあの記事を載せた記者だった。

自宅で首を吊った彼の遺書には、幾度とない謝罪と、へあの記事は全て私の作り話で、美人ばかりが命を落とす奇病など存在しません」と言う旨が綴られていた。また、さらに補足に並べていた「突然死した有名人」に関しても、絶大な人気の中で休む間もなく働き続けた結果の過労死であったり、美しい外見に対する同性からの妬みや反感にストレスを抱いた挙げ句の自殺であったりするのだと、一人一人について可能な範囲で調べ上げた内容の全てが記されていた。それはまるで、そうすることが彼にとつての悔悛であったかのようなだったと、今度は遺書の中身を独占スクープとして掲載したゴシップ誌の記事は締めくくっていた。

結果的に、連日続いていた高熱がふと気付けば下がっていた時のように、騒動は鎮まっていた。後遺症は重く、その後も長らく微熱は残っていたけれど、それでももう命に関わることはほとんど無くなっていた。そして、それから三ヶ月もすると、人々の感心は新たな流行へ移っていて、小さな売り上げを互いに奪い合っているゴシップ誌もまた、色々と派手な見出しや適当な作り話を載せては、少しでも他誌より先んじようと懸命になっていた。

と、そんな中に、こんな見出しがあった。

「^{ベスト}黒死病を超えた世紀の大流行。美人ばかり(?)を殺した恐怖の病で最も得をしたのは、

果たして誰であったのか？
それを掲載している雑誌は、コンビニの書棚の一番隅で、ちよこんと顔を出していた。

〈了〉